東京大學

情報記号論の諸問題

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

石田英敬

研究室：駒場キャンパス9号館323

MAIL： nulptyx@boz.c.u-tokyo.ac.jp

URL ： http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~nulptyx

http://www.nulptyx.com/

第3回講義
「記号の概念をめぐって」
（その2）

目次

I. Problematic Ecce Signum 或いは <記号＞の問題論的起源（前回）

II. Archeology <人工記号>の記号論（前回）

III. Epistemology 現代記号論の<記号>仮説（今回）

IV. Interface ＜記号>と<情報＞

Epistemology

III 現代記号論の〈記号〉仮説

quelques rappels

前々回のスライドより

4月17日のスライド「一般言語学講義」から

言語は観念を表現する記号のシステムであり、その点で、文字法とか、手話法とか、象徴儀式だとか、作法だとか、軍用信号だとかと、比較されうるものである。ただそれらのシステムのうちもっとも重要なものなのである。

そこで、社会のなかにおける記号の生活を研究するようなひとつの学を考えてみることができる；それは社会な心理学の・したがって一般な心理学の一部門をなすであろう；われわれはこれを記号学（Sémio logie。ギリシャ語の sem êion「記号」から）とよぼうとおもう。それは記号がなにから成り立ち、どんな法則がそれらを支配するかを教えるであろう。それはまだ存在しないのであるから、どんなものになるかはわからない；しかしそれは存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されている。言語学はそうした一般学の一部門にほかならず、記号学が発見する法則は言語学にも適用されるにちがいなく、後者はかくして人間的事象の総体のうちで、はっきりと定義された領域に結びつけられることになる。

（『一般言語学講義』邦訳　29 頁）

4月17日のスライド

人間の生活にとっての情報の意味作用を研究するようなひとつの学を構想してみることができる。私たちはそれを情報記号論（information semiotics ）と呼ぶであろう。それはまだ存在しないのであるからそれがどのようなものになるかは分からない。しかし、それは存在すべき権利を有し、その位置は予め決定されている。

こうした「認識論的身ぶり」について考えることからまず始めましょう

1

ソシュールの＜エピステモロジックな起債＞問題について

＜記号＞という（空）手形

ソシュールが振り出した＜エピステモロジックな手形＞を誰が引き受けるのか？

→ 資料1を参照

記号の仮説という手形は
なぜ振り出されたのか？

私の推理　その1

-19世紀末に何が起こったか？

マラルメ
Stéphane Mallarmé (1842-1898)

- 「世界は一冊の書物に到達するべくできている」
- 「文芸＝文字のようなものは存在するか。」

（cf.　Hegel の『百科全書』）

文字/書物の危機

文字/書物ベースの知の「終わり」の予感

cf.「書物の終わりとエクリチュールの始まり」

（デリダ『痕跡学』第1章）

メディオロジー的考察 1
Ishida’s hypothesis

「ソシュール革命もまたひとつのテクノロジー革命である。」

（cf. ｷﾄﾗｰ「ｸﾞﾗﾓﾌｫﾝ ﾌｨﾙﾑ ﾀｲﾌﾟﾗｲﾀｰ」）

ソシュールの切断

- 「共時態言語学（la lingustique synchronique）」による言語学の歴史の切断は、文字と書物によって言語を書き取り研究するという「文献学（philology）」の方法の終わり、そして音声記録（phonograph）の知とテクノロジーの時代の到来を意味する。

→ 音声記録メディアによる記録と解析、そして、脳の言語中枢の発見

＜文字＞の発明以来何度目かのメタ言語の「テクノロジー革命」(シルヴァン・オールー Sylvain Auroux)に相当する。

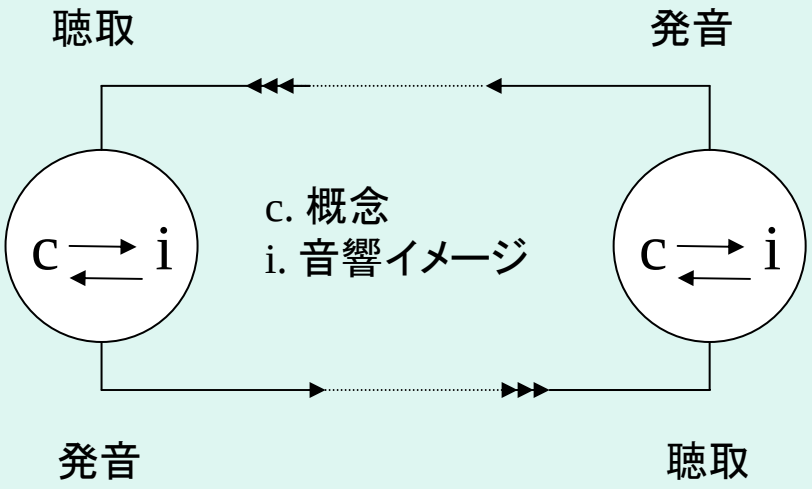
（ルロア・グーランのいう、＜手＞が発達させた＜技術＞が言語中枢の働きを書き取るというメタ言語の関係が、新たな転回を迎えた。）

音韻論の誕生と音声記録装置

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『音韻論の誕生と音声記録装置』
を省略させて頂きます。

ソシュール 「ことばの回路」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
“PLACE DE LA LANGUE
DANS LES FAITS DE LANGAGE”
を省略させて頂きます。



エディソンによるPhonographの発明 1877

エディソンは電話のしゃべり口にむかって大声で「ハロー」と叫んでいた。振動板がふるえ、そこにとりつけられていた尖筆が動きだし、その尖筆が少しずつ移動するパラフィン紙に書き込みをしてゆく。ときは1877年7月。ときは1877年7月、移動する紙テープならチューリングもコンピュータに用いたものだが、それよりもさらに87年も前のことだ。したがってエディソンの書き込みはまだ当然アナログである。・・・（キトラー　前掲書　39頁）

→　*資料2参照*

Phonograph・脳・電話

音声記録装置が書き取るコトバ、脳への書き込み場所の解明、そして脳と脳をつないで書き込むコミュニケーション図式としての電話という技術＋知の分節化がおこなわれたときに現代言語学は誕生した。

音声学と音韻論

「音声学 phonetics」: phonationの研究

「音韻論phonology」: phonemes の研究

もうひとつの人工言語:「発音記号」

「etic/emic」問題の発生

意味の構成単位の研究として音韻論

→ 資料3参照

「記号　signe」の知

Phonographが書き取る「コトバの写真」のなかで
どこに＜意味＞の構成要素があるのか？

→

＜音声＞　－　＜音＞　＝　＜記号＞

したがって「記号」論は、意味批判の知である

2
パースの記号分類について

Rappel

ボルヘス
「ジョン・ウィルキンズの分析言語」

ウィルキンズは宇宙を四〇のカテゴリーないし類に分けるが、類は差に、差はさらに種に分かたれる。おのおのの類には、二文字の単音節言語があてられ、おのおのの差には子音、おのおのの種には母音があてられる。こうして、たとえばdeは四大を、debは四大の最初である火を、debaは火の一部をなす炎を意味する。ルテリエが考案した類似の言語（1850）では、aは動物、abは哺乳動物、abiは草食動物、abivは馬科の動物、aboは肉食動物…。またボニファシオ・ソトス・オチャンドの言語（1845）では、Imabaは建物、imacaは娼家、imafeは病院、imafoはペスト施病院、imariは家、imaru は別荘…。（「異端審問」中村健二訳　155頁）

「百科全書」とパース

ソシュールが生み出したのが言語記号をモデルとした言語中心的な記号学の系譜であるのに対して、アメリカの哲学者・論理学者C.S.パースが打ち出したのは、人間と宇宙のあらゆる現象を記号のプロセスとして捉える汎記号説的（pansemiotic)な記号論の流れです。化学、数学、論理学、哲学から天文学や測地学、あるいはワイン研究にいたる百科全書的な博識をもち、多岐にわたる研究分野で数千件にものぼる論文を残したパースの仕事を貫いていたのは、「宇宙全体とは、記号のみから成り立っているといわないまでも、記号に充ち満ちているものである」という信念でした。「数学にせよ、倫理学、形而上学、重力、熱力学、光学、化学、比較解剖学、天文学、心理学、音声学、経済学、科学史、ホイスト、男女、ワイン、気象学にせよ、私にとって記号研究として行われなかったものは何もない。」と彼は述べています。

パースと「カテゴリー」

パースのカント批判
→汎記号説にもとづく「カテゴリー」の再構想

cf. U. エーコ『カントとカモノハシ』

推論としての＜人間＞

人間が使っている言葉や記号こそ人間自身である。なぜなら、すべての思考は記号であるということが、生は一連の思考であるということと一緒になって、人間は記号であるということを証明するように、すべての思考は外的な記号であるということは、人間は外的な記号であるということを証明するからである。つまり人間と外的な記号とはhomoとmanという言葉が同一であるのと同じ意味において、同一である。こういう訳で、私の言語は私自身の総体である。というのは私は思考であるから。

「ハイパーテクスト事典」の方へ

「一次性・二次性・三次性」のカテゴリと「記号分類」、そして「推論」の理論は、百科事典をハイパーテクスト化する方向へと向かう。

来週

Interface ＜記号〉と〈情報＞

ソシュールおよびパースの主要概念と「情報」について扱います。